

表紙, 目次, 寄書, 抄録, 雑録, 漫録, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41663

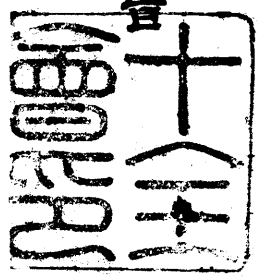
平光三

明治三十一年十一月八日發行

十全會雜誌

第四高等學校十全會

第七號



◎十全會雜誌第七號目次

◎原著及實驗

◎「まつさーヒー」ニ就テ

下平用彩

◎婦人ノ腹水

岡田剛吉

◎僞盲ノ鑑定實驗

渡 孚 貞

◎寄 書

◎「ロエントゲン」氏X線ノ

臨床的價値

鈴木寛之助

◎膀胱充滿ト腫瘍トノ誤診
實例

藤 岡 勝 治

◎抄 錄

◎齒牙疾病ノ女子生殖器ニ於ケル關係

◎肺炎菌ニ因ル産褥中ノ傳染ニ就テ

◎筋腫切除術ノ適應症及ヒ禁忌

以上 久 保 武

◎腸窒扶斯ノ血清療法

◎書籍ニ因スル傳染病芽ノ運搬

◎牛ノ脾臟及ヒ骨髓ヲ用フル慢性「マラリア」療法

◎淋巴道ニ於ケル逆流轉移ニ就テ

以上 M、K 生

◎雜 錄

◎金澤地方防癩私見

生 沼 曹 六

◎漫 錄

◎亡友吉村君ヲ憶フ

松 浪 生

◎先師岡部先生ヲ深ク
悲シミテ

K、 K 生

◎亡友富田、吉村二君ヲ惜ミテ全

◎摺筆ノ辭

松原鏡腸
久保輪壽

◎漫々錄

點 玄 道人

◎秋夜忍故郷

小 立 野 生

◎觸感錄

演 口 竹 軒

◎雜 報

數十件

◎廣 告

數 件

明治三十一年八月十八日

○○○○○ 殿

○○縣○○市○○町○○番地

鑑定人 ○○○○○○ 印

九月下旬甲醫ヨリ來書アリ右事件公判ノ結果加害者三名ハ各重禁錮拾ヶ月ノ刑ニ處セラレ遂ニ服罪セリト謂フ

(未完)

寄 書

醫學得業士 鈴木寛之助 纂譯

十九世紀理學的醫學ノ進歩ハ、駿々乎トシテ其抵止スル所ヲ知ラス、殊ニ醫學力、科學的基盤ヲ得テ、立脚ノ地歩ヲ形成セシ以來、學ニ術ニ益々其粹ヲ究ムルニ至リ、昨ハ血治療法、臟器療法ヲ臨床上ニ試ミ、玄妙ナル理論ヲ實際ニ應用シ、今ハろえんとげん氏X線テフ空前特種ノ發見アルヤ、敏捷ナル醫學者ハ直ニ探テ以テ我醫界ヲ照ス。嗚呼熾ンナラスヤ。蓋シ原因學上治療學上ノ大進歩ト共ニ、診斷學上ニ於ケルX線ハ、本世紀末ノ紀念トシテ、吾曹醫學者ノ注目ヲ牽クニ足ルモノナラシ。且ヤ已ニ幾多ノ實地家ハ、此ノ驚クヘキX線照輝ノ下ニ、往時剖檢ノ結果ニアラサレハ、認め得サリシ病竈ヲ目前ニ曝露シ、最モ精密ニ、最モ確實ニ、加カモ簡單ニ、知ルヲ得ルト云フノ報道、續

々到ルニ及ンテハ、身苟モ職ニ刀圭ノ事ニ從フ者、須ク眼ヲ張リ耳ヲ傾ケ、以テ仔細ノ觀察ヲ遂クヘキナリ。然レ本邦ノ醫家ニシテ、之ヲ實際ニ使用セシ者未タ多カラス、從テ喋々ニ線ヲ論スル者當ニ曉天ノ星ノミ、是レ本篇ヲ纂述スルニ際シ、最モ遺憾トスル所ナレトモ、而カモ今日ニ在テニ線ハ、果シテ我醫界ノ幾何區域ヲ照スカハ、各人ノ咸ナ齊ク知ラント欲スル所ナリ。仍テ今主トシテ、泰西ノ「リテラツール」ヲ涉獵シ、其獲タル多クノ報告ヲ蒐集シ、之ニ據テ以テ其價值ヲ世ニ介セントス。然リト雖モ、予輩素トヨリ文辭ニ嫻ハス、行文ノ拙ナル、意ノ微ヒサル、亦タ魯魚ノ膠漆カラス、杜撰ノ評敢テ辭スル所ニアラス。去レト予ト雖モ、敢テ誣妄以テ世ヲ欺クモノナラス、即チ左ニ本篇ノ纂譯ニ資シタル「リテラツール」ノ主要ナルモノ二三ヲ列記シ由テ以テ自ラ據ル所ヲ瞭カニセント欲ス。

- 1 Prof. Dr. Max Schueller : Extraction eines Knochens Stueckes aus der Speiserohre nach roehriger Roentgen durchleuchtung. (Berliner Klin. Wochenschr. nft. 1897. NO. 13.)
- 2 Prof. Dr. J. Hochneegg : Verblutungstod durch den verschluckten Fremdkoerper (Wiener klin. Wochenschrift. 1896 NO. 51.)
- 3 Dr. Kuemmel : Bedeutung der Roentgen'schen Strahlen Fuer Chirurgie (Vortrag) gehalten auf der 26 Vereinigung fuer deutschen chirurgischen Gesellschaft)
- 4 Ueber den Werth der Roentgenstrahlen fuer die Chirurgie von Dr. Schwertzel. (Berliner klin. Wochenschrift 1897. NO. 29-30.)

- 5 Dr. E. Wulstein : Ueber Aufnahmen des Klumpfes durch Roentgenstrahlen. (Berl. Klin. Wochenschr. 1897 NO. 16.)
- 3 Ewald : Demonstration einer intra vitam gewonnenen Roentgenzeichnung und des dazu gehoerigen anatomischen Praeparates eines Aortenaneurysmas (Vortrag, gehaltenen auf Berliner medicinische Gesellschaft. Sitzung vom 10. Novemb. 1897.)
- 7 Dr. Emil Reichard : Ueber eine mit Huelfe Roentgen'scher Strahlen angestellte Fremdkoerperntfernung (Berl. klin. Wochschr.)
- 8 Dr. Joachimsthal : Ueber einen Fall von angeborenem Defect an der rechten Thoraxhaelfte und der entsprechenden Hand. (mit genauer Bestimmung der Knochenverhaeltnisse durch eine Roentgenaufnahme.) (Berl. klin. W. 1896 NO. 36)
- 6 Dr. W. Cowl : Ueber den gegenwertigen Stand des roentgenischen Verfahrens (Berl. klin. W. 1896. NO. 30.)
- 11 Roentgenbilder bei Akromegalie von Dr. Max Edel (nach einer Demonstration in der Gesellschaft fuer Psychiatrie und Nervenkrankheiten zu Berlin am 14 December 1896.)

目 次

第一、異物ノ發見

甲、外部ヨリ進入セル異物ノ發見

乙、身體内ニ形成セシ異物則チ病的結石ノ發見

第二、骨及ヒ關節ニ於ケル變化ノ檢査

甲、骨折ノ診斷

乙、關節挫振ノ檢査

丙、假關節ノ檢査

丁、脱臼ノ檢査并ニ關節變形ノ照輝

戊、骨質内病竈ノ檢査

A、結核病竈及ヒ骨膿瘍

B、骨肉腫

C、護謨腫性骨膜炎

第三、産科學上ノ應用

第四、腦幹骨ノ撮影

第五、内臟器官ノ檢査——生体ニ於ケル解剖學及ヒ生理學ノ研究附診斷上ノ効價

甲、食道憩室及ヒ胃擴張ノ診査

乙、大動脈動脈瘤ノ診斷

丙、石灰變性ニ陥リタル血管ノ証明

丁、胸膜腔内滲出物ノ徹照

●寄 書

戌、X線ニ對スル腦髓ノ性質

第六、一二ノ興味アル畸形ノ撮影

第七、四肢肥^{アクトロメカリア}大症ノ撮影

第八、X線ノ皮膚ニ及ホス作用

第九、X線ノ治療的作用

ロエントゲンX線ノ臨床的價値

第一、異物ノ發見

某ノ物体ハX線ノ透過ニ由テ全ク透明トナリ、某ノ物体ハ之ニ反シテX線ヲ阻絶シテ其通過ヲ抑留シ依然暗体ヲナス、而シテX線ニ對スル此ノ兩種ノ他、更ニ幾多ノ中間ニ位ス可キモノアリト雖モ畢竟スルニ絕對的不透性質ヲ有スル物体ハ、可透性質中ニ在テ、瞭カニ其暗影ヲ現ハスモノナルカ故ニ、人体ノ諸内臟器管、筋肉等ノ透過質中ニ、不透性質(異物、骨)ノ在ルアラハ、該線ヲ利用シテ容易ニ其存否ヲ確ムルヲ得ヘク、其異物ハ、病理的或ハ生理的ニ自ラ身体内ニ發生シタルト、外部ヨリ進入シタルトチ問ハサレモ、其異物自己ノ性質カ、絕對的不透性ナレハ、最モ瞭カニ知ルヲ得ルナリ、然レモ可透性ニ近キ物体(例ハ胆石ノ如キ)ハ、之レヲ認ムルヲ難ク、若クハ全ク能ハス。又タX線ハ重層的ニ作用スルヲ以テ、照輝ノ瞬間ニハ全ク不透性ナルモ、時ヲ經ルニ從テ漸次ニ透明トナルモノ尠カラス、是レ實地上大ニ注目スヘキノコニシテ、照輝ノ最初ニ當リ看過セザランコトヲ要スルモノナリ。

甲、外部ヨリ進入セル異物

食道内ヨリ、嚥下ニハ骨片ヲ檢出シ、容易ニ摘出スルヲ得タル例。(伯林ノ博士ドクトル、まつくす、しゆるれる Dr. Max Schuller 報告)

千八百九十六年十一月二十六日ドクトルR氏ハハゆるれる氏ニ送ルニ、二日以前食時ニ際シ小骨片ヲ嚥下シ、猶食道内ニ停留スト云フ一老婦ヲ以テセリ。患者ハ強度ノ疼痛ヲ訴へ、一物モ嚥下スルヲ得ス、少量ノ液体ヲ嚥下スルモ、已ニ劇シキ疼痛ヲ感シ、夜間只タ座スルノミニテ全ク眠ル能ハス、——强健、榮養佳良ノ一婦人、頸部ハ外見上異常ナク、觸レハ疼痛殊ニ甚シト云フ、左側環狀軟骨下部ニ僅微ノ抗抵ヲ感スルモ、觸診ヲ始ムレハ劇迅ナル疼痛ヲ發スルカ爲メ、精密ニ局部ノ關係ヲ檢スル能ハス。喉頭鏡檢査ヲ行フニ、甚タ容易ニ喉頭ノ上口、其ノ内部、及ヒ咽頭ヲ認ムルヲ得レレ、然レレ一ノ異物ヲ認ムルヲナク、指ヲ口内ニ挿入スルモ、只タ會厭軟骨後部ニ達スルノミ、併シ左示指ヲ以テ、舌、會厭軟骨若クハ喉頭ヲ少ク前方ニ移動セシメツ、細長ノ橄欖(先端ノ小球)ヲ有スル食道消息子ヲ挿入セシニ、環狀軟骨下際ニ適シ、或ル硬固ノ物体ニ衝突セリ、反復檢査ノ後、確ニ食道ノ左壁ニ存スルヲ知り、其一端遊離シテ右方ニ突出スルカ、或ハ恐クハ尖端右壁ニ刺入シ、則チ異物ハ横位ヲナスカラ疑ヒリ、而シテ甚タ固ク増入セシモノニシテ、消息子ヲ抽出スルニ際シ、嚙ムカ如キ、或ハ啜ルカ如キ一種ノ雜音ヲ發シ、撥絛様振動ヲ感ス。骨片ヲ動サントシ、又之ヲ除カント試ムルモ意ノ如クナラス、仍テ外部ヨリ手術シテ摘出スルノ他、其術ナキヲ諭セシモ、患者直ニ承ハス。然レ翌朝ニ至リ手術ヲ乞フテしゆるれるノ「クリニツク」ニ來ル。先ツ外食道

截開術ニ必要ナル準備ヲ整ヒシカ、氏ハ以爲ク、ろえんとげん線ノ徹照ヲ行フテ後ニ手術センニハ、蓋シ困難ヲ減スルヲ得ント、然レ爰ニ緊要ナルハ、今日マテ金屬性物質ハ証明シ得タルモ、食道内ニ存スル小骨片ノ如キ、果シテX線ニ依テ証明シ能フヤ否ヤ(S. T. Macintyre: Roentgenstrays in laryngeal Surgery. Journ of Lar. 1896. NO 5, Refer. in Centralblatt fuer Chirurgie 1896. NO. 28)ヲ確定セントスルニアリシ。若シ小骨片モ之ヲ知り能フモノトセハ、只ニ其部位ト位置トヲ精密ニ定メ得ルノミナラス、尙進テ口腔ヨリ之ニ匹適スル鉗子ヲ挿入シ、容易ニ抽出スルヲ得ヘシト。

此ノ検査ニ、伯林ノ Firna Ferd Erneckeノ装置ヲ撰ミ、先ツ頭ヲ強ク後方ニ屈セシメ、頸部ノ左側ヨリろえんとげん線ヲ放チ、右側頭部及ヒ頸部密ニ徹照簾 Durchleuchtungsschirm(投射移出簾 Projektionschirm)ヲ接着セシメ、室内ヲ暗黒トナシ電流ヲ通スルヤ否ヤ、直ニ透明ナル簾上ニ、鮮明ニシテ嚴然周圍ト區劃セハ下顎骨ノ陰影像ヲ認メ、其下際ニ接シテ、舌骨ノ陰影明カニ横位ヲナシテ表ハレ、尖端後上方ニ向テ屈曲スルヲ見ル、此ノ舌骨ニ密接シテ其直下ニS字ヲ引長シ、且ツ之ヲ轉倒セル形(一)狀ヲナシテ會厭軟骨ヲ寫出シ、甲狀軟骨ハ摸糊トシテ圓ク、十「フエンニヒ」質大ニ、環狀軟骨ハ鮮カニ横徑ノ暗影トシテ表ハレタリ。其後下方ニ接近シテ、蠶豆大、鋸齒狀縁ノ暗黒ナル陰影ヲ認ム。患者ノ頸甚タ短ク、且ツ筋ノ發育佳良ナリシヲ以テ、簾ヲシテ充分ニ接着セシムルヲ得ス、仍テ更ニ精細ニ知ラント欲シ、嚥下運動ヲナサシメシニ、喉頭ハ咽頭ト共ニ上前方ニ進シカ、該運動ニ隨伴シ、前キノ小影斑上方ニ昇リ、次テ再ヒ下降セリ。此際喉頭ト脊柱トノ間ハ、透明ナル三角形ヲ形成セシヲ以テ、嚥下時ニ當リ最モ著明ニ目撃スルヲ得シ。今外部ヨリ環狀軟骨下際

ノ左方ニ觸ルレハ、強度ノ疼痛ヲ發シ、其痛點全ク陰影ニ一致スルニ由リ、此ノ小陰影コソ、實ニ骨片ナルヲ確定スルヲ得タリ。始メ消息子検査ニ際シ、實際ヨリモ大ナルモノトシテ觸知セシカ爲メ、此ノ陰影ハ較々小ニ過クルカ如ク感セリ。然レモ此陰影ハ、予ノ意見ノ如ク、食道ノ初端ニ横徑ニ存スルカ故ニ、實物ヨリモ短縮シテ表ハレシモノナルヲ知レリ。次テ前方及ヒ後方ヨリ照セシニ、每常脊柱陰影ノ前方ニ表ハレ、又々右側ヨリ照スニ、左側ヨリスル如ク明瞭ナラサリシ。(氏ハ此陰影ヲ撮影セサリシ、是レ手術ノ準備已ニ全ク整ヒルヲ以テ、更ニ時ヲ費スヲ好マサリシヲ以テナリト) 次テ手術ニ着手スルノ前、更ニ長クシテ強ク屈曲セル鉗子所謂すてるく氏喉頭鉗子 Stoerk's Larynxzange. (S. K. Stoerk. Laryngoskopie u. Rhinoskopie in Pitha & Billroth, Handbuch Der allgemeinen u. speziellen Chirurgie III Hft. 7, S. 615, Fig. 137) ヲ用ヰテ、口内ヨリ骨片ヲ摘出セント試ミタリ。然レモ骨片強ク左壁ニ突入シ、右壁ニモ亦タ刺入セル爲メ、強キ抵抗ヲ有シ、容易ニ牽キ出スヘクモアラス、仍テ骨片ヲ固ク摘ミタルマ、鉗子ヲ右方ニ捻轉シ、狭ミタル鉗子ノ枝ノ方向ニ、骨片ヲ回轉シツ、細心注意シテ徐ロニ引き出セシニ、他ノ部ニ損傷ヲ作ラサリシ、是レ其小枝ノ銳利ナル尖端下方ニ向テ遊離シ、上方ノ申廣キ部ヲ保チシカ爲メナリ、斯クシテ得タル骨片ヲ檢スルニ、刀鞘狀ニシテ鋭尖ナル鵝ノ管狀骨ニシテ、長三、二仙迷(約一、四ツオール)、尖端ノ巾〇、七仙迷、其側緣ハ少ク屈曲セリ。

一二日間患婦ヲ氏ノクリニツクニ留ラシテ、凡テノ食物ハ唯タ灌腸ニ依リ、口ヨリハ蒸溜水ノミヲ攝取セシメタリ、第一日ノ夕ニ強度ノ腫脹、聲音嘶喑、輕微ノ体温昇騰ヲ發シタルヲ以テ、〇、五ノ

安知必林ヲ投シ、濕性奄法ヲ施セシニ過スシテ、其他何等ノ困難ヲモ訴ヒス、四日ノ後ニハ嚙下時ノ疼痛全ク去リ、患者欣然退院セリ。

更ニ一言スヘキハ、殊ニ徹照像 Durchleuchtungsbild ノ浩益ナリ。則チ右ノ老婦ニ於テ、喉頭軟骨石灰化ノ種々ナル程度ヲ示シタルニ在リ、故ニゆるれる博士ハ、其後試験的ニ若年ノ者ニ試ミシニ唯タ舌骨ノミ明瞭ニ表ハレ、他ノ喉頭軟骨ハ前例ノ如ク、著明ニ認ムルヲ得サリシ。而シテ十五歳ノ童男ヲ照セシニ、脊柱前ハ只タ透明ノ間隙ヲ生シ、著ク認ムヘキハ、齒牙ヲ閉鎖セル下顎骨ニシテ、其下際ニ明ニ舌骨ヲ認メ、喉頭部ノ位置ニハ、雲烟摸糊トシテ僅ニ不明ノ影斑 *Schattenflecke* ヲ生セシニ過キス。亦タ少年者ニ於テモ、停留セル骨片ハ X 線ノ照輝ニ依リ、之ニ適スル部ニ陰影ヲ表ハスヲ以テ、勿論認知スルヲ得ヘク、亦タ金屬体ノ如キ、頸部ヲ徹照セハ、前後ヨリ認ムルヲ得、是レ金屬ノ如キハ脊柱ヲ透過シテ見ルヘケレハナリ、(金屬ハ骨ヨリモ透過スルコト少シ) 今試ニ鐵筆ノ一箇ヲ取り、之ヲ頭部ノ一側ニ置キ、X 線ヲ以テ照スニ、全頭蓋ヲ透過シテ良ク鐵筆ノ陰影ヲ見ルヘシ。

終ニ氏ハ述ヘテ曰ク。ろえんとげん線照輝ノ今日ハ、未タ世人ノ希望シタリシ如キ完備ノ域ニ進マサレモ、已上ノ例ニ掲ケタル始ク、關節強直又ハ假關節ニモ充分應用シタランニハ、徹照ノ必要決シテ渺カラサルヘシ。而シテ吾人ノ診斷的知識ノ益々宏遠ナルニ從ヒ、愈々手術的注意ノ上ニ於テ幾多ノ興味有ル發意ヲ經驗シ得ルヤ凝ナシ、予ノ自ラ施シタル頸部ノろえんとげん線徹照檢査ノ如キ、些細ノ經驗ニ過キサレモ、嚙下動作ノ生理學ニ關シ、緊要ナル解明ヲ得タルモノト云フヘ

ント。

X線徹照法ハ、食道消息子或ハ食道鏡ヲ以テ検査スルヨリモ、容易ニシテ且ツ確實ナリトハ、何人モ賛同スル所ニシテ、己ニ千八百九十六年十二月四日、維納皇立醫學會ニ於テ、Prof. Dr. J. Hoch-enege氏ハ「嚥下セル異物ニ因スル脱血死」ナル演説ヲナシ、(Wiener Klin. Wochenschrift 1896. NO. 51) 患者ニ苦痛ヲ與フル食道鏡ヲ以テスル検査ニ代ユルニ、X線ノ徹照ヲ應用セハ甚タ可ナリ、死体ノ食道内ニ、雞嬾ノ骨、及ヒ齒牙ヲ窺入シタルモノチ、明ニ撮影スルチ得ルカ故ニ、徹照ニ依リテ異物ノ抽出ヲ幫助セハ、大ニ利アリ、之レ今日マテ主トシテ診斷上ニノミ應用セラレタリシモ、治療上ニモ亦々試ムルチ要スト、豫言セシコアリシカ、幾モナクシテ生体ニ試ムルノ機會ニ遭遇セリト。

三歳ノ小兒、一「マルク」大ノ貨幣ヲ食物ト共ニ嚥下シタリト、果シテ何レノ部ニ停滯セルヤヲ確定センカ爲メ、全消化管ヲ徹照シテ之ヲ確メタリ。(Wiener Klin. Wochenschrift. 1897. NO. 8) 爾來食道ノ徹照ハ異物ノ疑アルノ際、消息子検査、及ヒ食道鏡検査ヨリモ最モ完全ナル、結果ヲ得ルニ至レリ。

同様ノ論題ハ、己ニ千八百九十六年七月二日、Macintyre氏ニ依リテ死体検査ト生体經驗トニ就キ、縷々報告セラレタリ(Centralblatt für Chirurgie NO. 28.)

其他れうイー、とるん、Levy-Dornノ報告ト同ク、食道内頸部ノ高サニ於テ、小兒ノ嚥下セル貨幣ヲ發見シ Pean & Raw 或ハ影像ニ依テ胃中ノ貨幣ヲ証明シ、之ヲ手術的ニ除キ(White)、或ハ第六

第七肋間腔ノ高サニ於テ、食道内ニ六ケノ齒アル義齒ヲ發見シ(Miller & Reid)或ハ肺臟中ノ毛氈止メヲ(Poach)檢出セリ。

身体内部ニ存スル彈丸ノ証明

身体内彈丸ノ存否ヲ判定スルハ、往々ニシテ難ク、或ハ全ク爲ス能ハス、然レモ射入シタル彈丸ノ位置ヲ知ルハ、頗ル緊要ナルコトアリ、則チ是ニ由テ以テ治療ノ方針定マリ、手術時ノ考案或ハ注意ヲ考慮スルヲ得、加之ナラス死体ニ在テハ、彈丸ノ所在ニ由リ其死因ヲ明瞭ニ証明スルヲ得ヘシ、故ニ這般ノ應用ハ、實ニ法醫學上貴重ナル証明ヲ與フルコトアリ、而シテ彈丸証明ノ報告ハ續々相堆ミ、一々茲ニ掲出セントスルハ、到底能ハサルノ事ニシテ、加カモ有要ノ業ニ非ラス、故ニ只一二ノ例ヲ述ヘン

四十年ノ一男子、十八年前一メートルノ距離ヨリ旋回銃ヲ以テ、右眼下部ヲ射ラレ、同側網膜剝離ノ爲メ、右眼視力全ク消失シ、當時彈丸ヲ搜索セシモ、遂ニ其所在ヲ知ルヲ得ス。爾後異常ヲ感セザリシカ、四年前ヨリ後頭部ニ劇痛ヲ發セリト。千八百九十五年十二月八日、八一〇仙迷ノ距離ニ於テ十五分間照セシモ(其方向左側ヨリ右側ニ向フ)、知ルヲ得ス、更ニ後頭部ニX線ヲ向ハシメ、亦タ十五分間照セシモ、同ク明ナラス、止ムヲ得ス同日ハ先ツ中止シ、更ニ八日ヲ經テ再ヒ側方ヨリ照セシモ陰性ナリキ。然レモ背面ヨリセシニ、明ニ圓形ノ陰影ヲ認メタリ。又一ハ三十歳ノ男子、十二年前口經七密迷ノ小銃ヲ以テ、五十仙迷ノ距離ヨリ右眼下部ヲ射撃セラレ、彈丸ハ右眼外角ヲ通シ、后上方ニ向テ進入ス。當時百方搜索セシモ、彈丸ノ所在ヲ知ルニ由ナク、其儘ニ放置シテ今日

ニ至ルト。仍テ右顳顬部ヨリ、右顳顬部ニ向ヒ、X線ヲ以テ徹照スルコト二十五分間、鮮明ナル撮影ヲナスヲ得テ、彈丸ノ位置判然セリ (Forster)。

一砲兵Xナルモノ、千八百九十六年秋軍隊ニ入ル、是ヨリ前千八百九十三年ノ夏拳銃ヲ以テ左脚ヲ射撃セラル、銃丸ハ斜メノ方向ヲ取り、膝蓋骨上縁ヨリ關節内ニ、又ハ關節ヲ通過シテ進入セシナルヘク、射出口ハ之ヲ認メス、負傷後數週間就床シ、後チ歩行シ得ルニ至リタルモ、膝部ヲ屈スルヲ得スシテ、甚タ跛行スルニ至レリ、爾來諸症徐ロニ消失セシモ、尙ホ長時間ノ起立或ハ歩行ニ際シ、左脚ニ強度ノ疼痛ヲ感セリ、然レ左膝關節ノ運動全ク健全ナルヲ以テ、四年前負傷セシコトヲ陳ヘシモ、信據スヘキ點ナキノ故ヲ以テ合格セリ。射入口ニ適スル部ニハ癍痕ヲ見ルモ、他ニ何等ノ異常ヲモ認ムルコトナシ、然レ兵練兵ノ際常ニ疼痛ヲ訴フルヲ以テ、遂ニ退營ヲ命セラレ、「メツケレソブルヒ」兵營ヨリ「アルトナ」病院ニ入り、此處ニ乃えんとげん線ノ徹照ヲ施シタリシニ、フルオレスチエンツ幕上ニ暗點ヲ表ハシ、上脛腓關節ニ彈丸ノ存スルコトヲ知レリ、此所見ニ由リ、服役ニ堪難キモノナリトノ充分ナル証明ヲ與フルニ至レリ。(Dr. Schmetzel)

手指中ニ刺入セル針ノ説明

本例ニ述ブルガ如ク、期クモ容易ニ異物ヲ摘出シ得ルノ利便ヲ感スルコトヲ見ハ、誰カ又タX線ノ採用ヲ賛セサルモノヤアル。

一患者、五十九日前右手ニ縫針ヲ刺シ、針ハ中途ヨリ折レ、遂ニ殘片ヲ除去スル能ハサリシガ、當時特別ノ障害ナカリシヲ以テ之ヲ放置セシニ、三週ヲ經テ指ニ強劇ノ疼痛ヲ覺ユルニ至レリ、然レ

患者自ラ認ムベキ變化ヲ呈セス、疼痛時ヲ追フテ益々増劇シ、手ヨリ前膊中央部ニ放散セリ、依テ針ヲ除キ疼痛ヲ緩解センコトヲ希ヒ、九十六年三月十日「ポーセン」洲看護病院ニ來ル。診スルニ右手第四指ノ外側ニシテ第二指骨間關節部ニ當リ、甚タ小ナル一癢痕ヲ認ム、患者自ラモ該部ヨリ刺入セシナラント思爲スト、然レモ該部并ニ未稍ヨリ中心ニ亘リテ全指ヲ強ク壓スルモ、疼痛ヲ惹起スルコナク、且ツ手部ニ於テモ針ノ存在スルナラント認ムヘキ部位ナシ、患者自ラるえんとげん線ノ徹照法ヲ施カレンコトヲ乞ヒ、更ニ手術ニ依テ疼痛ヲ去ラント望ム、是レ頗ル興味アリ、且ツ鴻益アルコナルヲ以テ直ニ之ヲ容ル。

三月十五日午前、先ツ右手ヨリ前膊中央ニ至ルマテヲ撮影セリ、其照輝時間殆ント一時間半、而シテ手肘ノ手掌面ヲ小函ニ向ハシメ、薄キ繃帶ヲ以テ之ヲ固定シ管ハ大約十五仙迷ノモノヲ使用、手ヲ超エテ地平ニ置ケリ、次テ板ヲ挿入シテ影像ヲ檢セシニ、惜ヒ哉手ノ位置板面ニ對シ恰適ナラカリシ爲メ、示中環指ハ板ノ範圍外ニ出テ、辛フシテ第四指第三節末端ニ近ク異物ノ存スルコトヲ示セシノミナリシモ、其他手前膊ノ骨格、第一指骨基底ノ關節面、拇指ノ種子骨、各箇ノ腕骨等、皆歴々之ヲ指適スルヲ得ヘク、撓骨尺骨ハ周圍ノ筋ヨリ嚴然區劃シテ表ハル、之ニ在テハ手掌面ノ方ヨリ觀察セシモ、今手背ヨリ窺ヒシニ、手ハ掌面ノ方向ニ陷凹セルニヨリ、板上ノ影像更ニ判明トナリ、殊ニ腕骨部ニ濃密ノX線ヲ通シタルヲ以テ、該部ノ鮮明ナルハ云フモ更ナリ、突降スル撓尺二骨最暗黒トナリテ見エ、種子骨ト鈞狀突起トノ間ニ透明ノ一溝ヲ存シ、腕骨中央部透明トナリ以テ其凹陷ヲ示セリ。

尚異物ノ位置ヲ精密ニ探ランカ爲メ、三月十六日第四指ヲ四十分間照シテ撮影セシニ、異物ハ明カニ第三指骨ノ末端ニ近キ部ニ當リ、骨上ニ殆ント四十五度ノ角度ヲナシテ斜メニ位スルヲ認メ、該異物ノ長サハ正ニ七、五密迷ヲ算セリ。

則チ依的兒發霧ヲ行ヒ、深ク短キ切開ヲ施シ、針片ノ鈍端ニ達シ、直ニ鑷子ヲ以テ摘出セリ。更ニ此針ノ長ヲ計測セシニ、全ク影像ニ於テ檢セシ時ニ同シカリシ、而シテ創ヲ縫合シテ閉鎖セシニ、術後四日ニシテ手ノ疼痛全ク去リ、痕跡ダニ感ゼスト云フ(Dr. Emil Reichard)。

是ニ由テ之ヲ觀レハろえんどげん線照輝法ハ、其方法甚タ簡單ニシテ而カモ其價值頗ル大ナリ、實ニ將來ニ於テ這般ノ日常遭遇スヘキ小外科ニ於ケル價值定ニ偉大ナルモノナラン。

Levy-Dorn ハ大人ノ左側胸部ニ存スル銃丸ヲ証明シ、Dr. L. Wulstein モ二人ノ大人ニ於テ胸廓内ノ拳銃々丸ヲ發見セリ。其他脊柱、腹部骨盤等ニ於ケル異物モ、充分ニ証明スルヲ得可ク、腹部ニ於テひるふー氏卸 Murphy's Knopf ノ位置ヲ認ムルヲ得(The Lancet p. 1832) Poehc ハ小兒ノ「ブロートマルク」(貨幣ノ一種ニシテ薄キ金屬板)ヲ嚥下セシモノヲ撮影シテ其所在ヲ示シ、又タ數多ノ人ハ腸管内異物カ、日々ニ移動スルヲ証明シタリド。Wulstein ハ發育佳良ナル十六歳ノ處女ニ於テ、前年ノ十月手姪ヲ弄スルノ際、一ケノ毛針ヲ尿道内ニ挿入シ、遂ニ膀胱ニ達セリト云フ者ヲ檢シ、明ニ其位置ヲ知り、針ハ横位ヲナシ兩遊離端共ニ判然認ムルヲ得タリ、[Reitel] モ亦タ食道ノ第六―第七頸推ノ高サニ停滞シタル齒牙ノろえんどげん像ヲ示シ、且語テ曰ク、他ノ方法ニ依ルヨリモ容易ニ、危險ナク其位置ヲ確定シ得タリト。

已上述フルカ如ク、外科學上異物ノ搜索及ヒ摘出ニ對シ、X線照輝法ノ必要欠クヘカラサルモノナルコトハ、各人ノ容易ニ了會スル所ナリ、往時ヨリ外皮ニ創口ヲ有スル異物(例ハ彈丸)ハ、強テ之ヲ探究スルヲ許サザリシ、是レ全ク創ノ感染ト檢査ニ伴フ損傷、多クハ脈管)ノ併發スルコトアルヲ恐レタルカ故ニシテ、決シテ異物ノ存否、所在、位置モ知ルノ必要ナシトノ意ニアラサルナリ。又タ今日マテノ檢査法ニテハ、到底精密ナル狀況ヲ知ルハ得テ望ムヘカラサルコトニシテ、且ツ幾多ノ練磨ヲ經サレハ、殆ント成シ能ハサルナリ、然ニ燦々タルX線一ヒ輝カハ、最モ容易ニ確實ニ、檢査ニ伴フ危險アルナク、患者ニ苦痛ヲ與フルコトナク、瞬時ニシテ精シク知ルヲ得ン。宜シク日常ノ臨床上ニ採用スヘキモノナリ。而シテ今日マテ檢査セラレタル異物ハ、最モ屢々針、釘、小鉄片、硝子片等ニシテ、又タ上膊、胸腔、頭部、下腿等ニ存スル彈丸モ証明セラレタリ、凡テ之レ等ノ異物ハ、甚タ小ナルニアラサレハ、透過性ニ富メルX線モ、必ス異物ニヨリテ抑留セラル。又タ影像ニ由テ証明セシ異物ヲ手術的ニ除カント試ルニ際シ、其異物ノ陰影皆薄キ線狀ヲ呈スルコトアルカ爲メ、多クノ困難ヲ感スルコトアリ、然レモニツノ異ナル平面ヨリ異物ノ位置ヲ定ムレハ、更ニ容易トナルヘシ、其他ニケノ平面ヨリ照スノ他、Levy-Dornノ唱フル如ク、實体鏡的ノ像ヲ形成スルニ由リ、實地上能ク目的ヲ達スルヲ得ヘシ、又タ氣道内ノ異物或ハ氣管内「カニューレ」ノ位置モ、容易ニ確定スルヲ得ン。

異物ヲ認知センニハ、單ニ拔留謨白金藏簾 Bariumplatinocyanurschirm ヲ用テ、徹照ヲ施シ、簾上ノ暗影ニヨリテ容易ナリ、又タ厚キ身体部分ニ在テハ、物体ノ位置及ヒ存否ハ、簾上ノ暗影摸糊トシ

テ判然セサルコトアリ、期ク疑ハシキ場合ニハ、更ニ影像ヲ寫真板ニ撮影スルヲ要ス。

異物ノ搜索ニ際シ、殊ニ注意スヘキハ、決シテ一側ノミヲ照ラシ以テ満足スヘキモノニアラサルコトニシテ、可及的數多ノ方向ヨリ照ラシ、其得タル影像ノ位置ヲ巧ニ綜合シテ、精密ニ位置形狀ヲ知ルヘシ、若シ單ニ一側ノミヨリノ所見ヲ以テ、直ニ摘出ニ着手スルモ、往々豫期シタルガ如ク、異物ニ到達セサルコトアリ、千八百九十七年十一月十日伯林醫學會ニ於テ、れさせる「*Heile*」ノ報告シタル一例ノ如キハ、正ニ這般ノ注意ヲ惹起スルニ足ラン。

十三歳ノ學童ノ彈丸ノ位置ヲ確定セントシテX線ヲ用ヰシガ、太タ困難ニ遭ヒリ、患者ハ三年前右側頸部ニ銃創ヲ負ヒ、今日ニ至リ初メテ嚙下困難、及ヒ喉頭障害ヲ發セルモノニシテ、先ヅX線ヲ通セシニ、彈丸ハ第一肋骨前ニシテ頸部軟組織中ニ位スルヲ示ス、仍テ直ニ該部ヲ截開セシモ、彈丸ヲ發見セズ、故ニ更ニ種々ノ方向ヨリ數回徹照シ、影像上其相互ニ境界スル各點ヲ頸部ニ就テ定メシニ、第一胸椎橫突起ノ後方ニ存スルヲ知り、直ニ摘出スルヲ得タリト。

(未完)

◎膀胱充滿ト腫瘍トヲ誤診セシ一例

左ノ一節ハ賛成會員藤岡勝治君カ先日小川教授へ消息ノ序報道セラレタルモノナリ吾輩實地醫學ニ從事スルモノ、大ヒニ注意スヘキ實驗ナラント思ハルヲ以テ茲ニ略記スル所以ナリ

編輯委員

大橋某 年齡十九才

既往症概略 三十日計リ前急劇ニ發熱シ二日ヲ經テ(妊娠七ヶ月)早産セリ爾來下腹部ニ一大腫物ヲ殘シ五六日後左下肢ニ浮腫ヲ來シ漸次衰弱シテ現時ニ至ル其間一醫ノ診療ヲ受ケシニ下腹ノ腫物ハ放置スル時ハ化膿スルニ至ルトナシ冷罨法ヲ施サレタルモ更ニ治ヲ得スシテ反リテ時々嘔吐ヲ來シ且ツ大小便失禁スルニ至ルト云フ

現在症 營養不良体格中等ノ一婦人半醒半睡ノ狀態ニテ褥上ニ横臥シ脈膊百二十至体温三十八度五分應答不判明ナリ理學的檢査上胸部氣管技加荅兒ノ症狀ヲ呈シ腹部ニ於テハ耻骨縫合部ヨリ臍部ニ達スル長卵形ノ腫物狀ヲナスモノアリ其ノ性質斷力性ニシテ著明ノ波動ヲ觸レ濁音ヲ呈ス臍腔ヨリ内診スルニ臍腔狹隘ニシテ前壁ハ后壁ニ向ツテ突出ス左下肢ハ右下肢ノ三倍大ニ浮腫シ肛門及ヒ外陰部ニハ梅毒性潰瘍ヲ多發ス肝臟脾臟異常ナク尿中少量ノ蛋白ヲ認ム

上記ノ所見ニヨリテ下腹ノ腫物ハ疑モナク膀胱充滿ナルヲ診定セリ蓋シ急性熱性病ヨリ膀胱麻痺ヲ起シ爲メニ膀胱充滿シテ一方ニハ左ノ惣腸骨靜脈ヲ壓迫シテ左下肢ノ浮腫ヲ招來シ又一方ニハ尿管症ヲ發起セシメテ患婦ヲシテ昏醉ニ陥ラシメタルモノナラン則チ「カテーテル」ヲ挿入シタルニ排尿スル事二千五百瓦ニ達シ其尿ノ反應ハ「アルカリ」性ニシテ惡臭ヲ有シ雲狀ノ緊狀物ヲ含

有ス此ノ排尿ト共ニ下腹ノ腫物ハ忽焉トシテ消失セリ

之レニヨリテ見ルニ以前冷罨法ヲ施シタル醫師ハ蓋シ膀胱充實ト腫物トヲ誤診セルモノナラン注
意スキヘ事ナラスヤ。

抄 録

◎齒牙疾病の女子生殖に

於ける關係

Dr. Jamon 氏に依きは多くの婦人は月經時前又は月經期中に於て齒牙并に齒齦の疼痛を發顯するものにして殊に春氣發動の初期又ハ月花開綻の時に當て屢々此疼痛を見る然きとも其齒牙實質は此際全く健康無害なるなり時としては同時に齒齦炎(Gingivitis)を惹起し齒齦腫張過敏となることあり此炎症ハ多分強度の流涎(Salivation)より透起せらるるものとして齒痛は往々兩耳の方に向つて放散するも、局處的治療に由て焮衝性齒齦腫張は多く速お消退せるものとす
此症徴は月經衰弱 Schwache Menstruation 若しくハ月經絶止 Menopause を患ふる婦人よ於ても亦

目撃せることあり故ハ月經期間は一齒たりとモ拔去せしめざるは頗る肝要のことなり實際に於ては Haemophilia (血友病)の如き只甚た稀に見るとはいへ寧ろ禁忌に属する也

妊婦乃強き唾液分泌は其懐胎の間ハ Zahn Caries (齒牙骨疽)の再度の發生に由て顯はき來るありカリエスの多くの齒牙を同時に浸蝕し且速に慢延するものにして分娩の始まるや多くは其骨疽性病機の休止を呈す而して次回の新しき妊娠と共に再び強盛して益々周圍に弘汎するお至る此時お當りカリエスは強度の齒痛及齒齦炎を并發すると常とす、神經痛的齒痛 Neuralgischen Zahn-schmerzenハ主として妊娠の前半期に於て發起す斯の如く妊娠の幾多有害なる影響に關して此期中は常に専ら口腔を清潔に保ち特に齒牙の保護に重きを置かざるべからず

(Revue internat. de Med. et de Chir. Prat.

1897. NO. 22.)

◎肺炎菌に因る産褥中の
傳染に就て

Dr. Schuhl 氏は産褥中肺炎菌傳染の實例と擧げ
特ふ一般の豫防消毒を注意と與へたり

嘗て分娩後子宮の衰弱 (Atonie) の爲め胎盤の剝
離を施し強き出血を發起せし一經産婦、羊膜の
大部残留せしも第四日にして子宮全く Curetté
(收縮)せり然るゝ同時に恰も安魏那の爲め強き
膜様被物を以て患へたる産婦は意外！子宮及其
附屬器の炎症并ひに稍々強度の浸出液と帶へる
助膜炎の如き惡しき後害を受けたり、嬰兒に就
ては分娩後第七日にして左眼の化膿性炎を惹起
し次て直に右眼も傳汎せしか幸ひたゞ左眼の
軽度の角膜混濁を殘せしのみよて治癒に著けり
此扁桃腺被膜、惡露及化膿性眼炎の細菌學的檢
査の實に吾人に驚くべき結果を與へたり即諸て

の疾病の原因は一にフレンケル氏肺炎球菌 (Froenkel'sche Pneumococcus) に胚胎せしこと之れなり

肺炎球菌に因る産褥傳染乃其他の場合を Hergott 氏
の經験せり、氏は或る兒頭擦碎術 (Basiotripsie) を施されし一婦人に於て陰門及膣に發見せし壞
疽性薄板 (Gangraenöse Plaques) の鏡見上全く肺
炎菌に基由せるを認識せり、第二のファールは
Piaocenta Praevia (前置胎盤) を有せる一婦人にま
て最初分娩か足位廻轉法 (Wendung auf die Füsse)
に依て遂けられ二日を経て膣及子宮膣部に於て
壞疽性薄板を發生せり而して其細菌的検査か又
同しく肺炎菌によるを証認せしめたり一二時の
後膣入口に於てたゞ肺炎菌のみを含蓄せる膿瘍
破開し次て忽然として左側の助膜炎を顯發し爲
めに患婦の鬼籍に上れり
茲に吾人ハ Hergott 氏の種々産褥傳染に於ける

細菌學的試験の價値を承認すと雖も特に彼は醫士たるもの常に先づ *Saine pner perale Yibection* (純粹産毒傳染) に就て思考し而して其治療上の度量を是れに適合して整理すべきことの要あるを痛言せり

(*Revue indernat. de med. et de chir. Paris 1897. NO. 22.*)

◎筋腫切除術 *Wagonneomie* の適應症及禁忌

手術の成功か近時防腐法の應用以來急速的の進歩をなし以前 *Heger* 氏の開腹筋腫切除術 (*Nepheromyotomie*) を以て卓拔最好の地位に置かれし狹隘窘迫の境界を脱して今や全然其擴張を見るに至り

Breslau の *Professor. Dr. Kustner* 氏は筋腫切除に適示及禁忌に就て次の如く述べたり
病痾困難を惹起する各々の筋腫を隔絶する爲め

吾人は手術の實施を望まざるべからず殊に危險の症狀に接しては毎常此方に依るべき要素より論を俟たず只夫れ緊急逼迫ならざる場合に於て種々の機會の起るに際し加之全子宮癱瘓の指示に就ては一に手術の決斷首肯を利發なる患婦の意向に委任すべし又中度の困難に接するも餘り長々 *Espektativ* (自然良能を待つ) を行ふべからず蓋し往々詳密な診斷を得難き肉腫に就て關聯することあればなり此關係に於て吾人は屢々實地に臨んで禁忌たるを知るべし而して其治療に困難なるを手術に先ちて豫期し得ば可あるも通常腫瘍發生は固有の状態に於て搜求すること能はざるなり
子宮頸部より扁卵帶兩葉の間に生ずる筋腫ありて膀胱の異常の位置變化より尿残渣の爲め炎症現象と發起するや緊急なる適示と表明するあり

又一様に僅に筋腫出血に依て起されたる貧血に依ても常々禁忌とどるす即突然の手術か血液損失を最少量お迄減すればなり

腫瘍の膿瘍に沿ふては勿論事情に従ひて手術を禁むへし

慢性炎症性肺疾患又は肺結核等乃合併症に就て筋腫の一侧の困難れ高度なるときは合併疾病の過度の慢延を呈せざる前早く切除するを以て至當となす

キユステル氏は炎症機の高進の爲め手術の後恰も急性粟粒結核の結果として死亡状態 (Exitus Letalis) を取れるものに於て一の古き胡桃大の瘻後包括せる病竈を肺基底に発見せりと云ふも蓋し甚だ稀有お屬するふじむ

心筋の脂肪化又ハ其褐色萎縮は多分管耗せる出血の續發症あるへし而して格段に麻酔の爲め亡壞することあり

故に死の轉歸は此種の心臓變質に基するあり然れども多分は手術の間お來る傳染病か充分高く此原因と有するなり

又心筋炎より來る困難なる場合に於ては開腹術の施行と以て不適當とそ是實にキユステル氏の報告せる實例に徴とモ容易に証認すると得へし筋腫を以て合併せる癌腫は已に吾人ハ理會する難く絶對的禁忌となす。之に反し弘汎ならざる腹膜結核に於てハ適示と與ふ

Sammlun Klini vortsaage N. F. NO. 164
Leipiz. Besckit off nnd Haertel. 1896.

以上三項 久保 武 抄録

◎臨牀的治療報告 (Wiener. Kl.

Wo. schrift. Woenig. 1896 Nr. 10)

予近比匡底を探り維納週報を繙き左の數項を得たり事稍陳腐に屬と雖も珍奇の感ありしと以て拙を忍て抄出す

○腸室扶斯の血清療法

Chanteneese氏は報ゆらく馬を以て眞正チブス菌に對し免疫性を得せしめ該動物より採取せる血清は、モルモット、に對し一回量五分の一滴を注射し二十四時間チブス毒素致死量に反抗せんとを得(對稱動物は直ち斃死するに係らざると、尙同氏は是等乃好結果を得るのみならず健康人及動物に用ひ毫も嫌惡をへき副作用の顯るゝことなきを證明し一步進て三名の腸室扶斯患者(糞便中細菌の証明あるもの)に使用し注射後七日にして同患者悉く治癒に趣けることを報せり、

○書籍を因する傳染病芽の運搬

Cagal及Cartini氏ハ紙を以て感染せしめたる Pontonの注射により試験動物を殺さしめたり、該紙は以前膿連鎖菌及肺炎球菌或ハチフテリー性肺壞疽の小分子に接觸せらるる者なるを知れり、其後傳染病患者の手を経たる書籍の傳染病毒運

搬は世人多く等閑に付し書籍消毒の注意も怠り

勝なりき著者の實檢によれば Trocken Offenに於ける消毒は最簡單且安全に成効し得へし併し表紙は假綴のものに適當すれども通常の表紙(革製?)は熱下に於て不便を感ずると有とすと

○牛の脾臟及骨髓と用る慢性マテリヤ療法

Origmann氏は四回の麻拉里亞惡疫質に五〇、〇の牛の脾臟及骨髓一〇、〇を採り一箇の卵黃と共に攪拌し服用せしめたり、爾後二週間永きも四週間に於て患者は著しく佳徵を呈し一汎症狀は大に調和し食機不振は漸次消失に至り、發作の間歇は著名に延引せると得羸瘦、足蹠周圍の浮腫、心悸兀進等総して惡疫質徵候と云ふべきものは悉く終りを告ぐるに至れり、之より同氏は同時に他の惡疫質疾患、Akromegalia傳染的疾患及慢性マテリヤ狀の症を訴ふるものみ對し斯の如き動物に基因する藥餌の應用により充

分別除の見込あるへいと信せり。

○淋巴道に於ける逆流轉移に就て (Von Dr.

Karlverth)

著者は先づ其學說として淋巴管の辨装置及微力なる淋巴液流動に就て論し且曰く假令逆流運動生ずるとせんの人ば想像すへし未だ普通の求心性流動力に打勝ち遠心性流動を遂行するは能ふへくもあらず加之淋巴管壁辨の大は阻碍は勞を執るへしと然れども局所に向て漸次増成する抵抗力來らん僅少あると雖遂に連續流動として屢々障害に至らしむへし、尙淋巴管自己の搏動を以て該説明と求めたる所あれり、著者の同時にリテラツールに於て已知の逆流轉移七回と報告せり殊み内一回の如きい著明の實驗なりと云ふへし、即ち幽門部單純癌にして肝臟、腸間膜腺、乳糜管、腹膜後部腺、副腎、助膜、頸腺、及皮下組織に廣汎なる轉移を起せり、著者の原發部及腸

間膜腺腫瘍組織の一片を檢査せしに、後者によりては淋巴管内容に全く淋巴球及腫瘍細胞と以て成立し居れり、蓋し當該細胞と淋巴管壁充質とは何たる關係をも有するをなく且つ何處乃管縁に於ても内皮組織の癌細胞形成の痕跡たも發見せざりき、一二の細胞の如きは巨大なるのみならず數箇の核を有し(示指する如く)恰も遊離中自己に發育せるか如き觀あり、管腔の中央に於ては屢々多數の癌細胞を見、皆箇々獨立に浮遊し宛も自由ある大道を淋巴球と共に淋巴流に従て徜徉するの觀あり、併し何處も於ても管腔と充填するか如き多數に至らず」著者は逆流轉移の説明を左の二點に歸着せり

一、淋巴返廻流動

二、腫瘍細胞自己のアメーバ様運動

以上四項

M R 生抄

雜 錄

◎金澤地方防癩私見

生 沼 曹 六

日本か多癩國の一なるに拘りらそ未だ防癩法は完備を見ざるの國民の大なる不幸と謂ふへし夫れ虎列刺や赤痢や腸窒扶斯や人お傳はりて其命と殞さしむるもの其數實に多し然れども此れ等乃疫癘に對しては政府爲めに傳染病規則あるものを設けて以て停船に檢疫に隔離し消毒に防疫の道(假令其方法は盡く合理的からざるにせよ)盡さざるをかくして醫俗の人亦恟々として及びさふんを是を恐る獨り癩病に至りては其病症を發するに至るの甚た緩に於て既に病症を發したるれ後も其經過の慢なるか爲め人の注意を引くと少く加ふるに世俗未だ其傳染病なるを知るとな

く多くは天刑病と一稍進歩したる智識を有するものも尙且遺傳病なりと一敢て其傳染乃如何を恐るざるものゝ如し殊に知らず注意の外お流るゝ害毒の人類を殲し國力と萎靡せしむるの更に甚たしきを、殊に知らず經過の久しき間、病芽を傳播するとの更に著しきを、一部落舉て癩村となり隣村に傳はり一郡に蔓まり一國に延ぶるに至て驚愕し周章し消毒せよ消毒せよと呼ぶ之れ恰も猛火天よ冲するの時に當て一掬の水を投せんとするか如し火の正に全都を焼き盡して一望の焦土となさそん止ます隔離せよ追放せよと云ふ一國の民と舉げて何處にか隔離すべき反て既に他邦癩患者の追放場たらんのみ

歐洲中部に於ては中世紀以來癩病は全く其跡を絶ちたりと思へりしか近年佛國は大西洋沿岸お其巢窟を發見し續て獨國の「メーメル」區には魯國より傳播して益々蔓延の勢あるを知り衆目俄

に癩病に注ぎ各國の學者の集まりて防癩會なるもれど組織し瀕りふ防遏の策を講せり而して「スカンジナビア」には地方病として古より絶えず多數乃癩患者を有せしを以て之を對する防遏の處置も亦大に觀るべきものあり多くの學者は諾威の治癩院の組織を以て最も合理穩當のものなりとし獨國に於ては既に其組織を以て治

陸地方と見る余は正確なる統計を得て以て証すること能はずと雖ども其甚た甚からざるは亦掩ふへからざるの事實あり現に余か本年三月より同七月中旬に至る僅々百三十餘日間より外科「ボリックリニツク」に於て親しく實驗したるもののみを以てするも尙十名の患者を算せり即ち次表の如し

癩院を「メーメル」區に設けたりと云ふ我國の學者も亦近時防癩の事を説くもの尠からず

番 1 斑 病類 性 女 年齢 職業 住 地
麻痺癩 女 二十才 下婢 加賀能美郡山口村

我國か多癩國の一あるとは上州の草津温泉に遊

2 同 男 卅三才 果物商 同金澤市

ひたるものゝ誰も知る所あるへ該温泉場には

3 結節癩 男 五十才 農 同河北郡英村

一種の治癩醫とも云ふべきものありて點灸入浴

4 斑 麻痺癩 女 二十才 鑛泉宿 同江沼郡山中
仲居

等の法を用ゐる多數の癩患者を治療すと云ふ其他

5 同 女 十三才 農 同石川郡諸地

肥後熊本の清正公詞讀の琴平詞總の成田山甲の

6 同 男 廿二才 農 同石川郡朝日村

身延山の如き皆多數癩患者の群居地かりと云ふ

7 同 女 廿七才 農 同河北郡土子

現んや又癩村とも稱せべき多數の患者と有する

8 同 男 廿六才 學生 越前吉田郡

部落の諸方に存すと云ふに於てをや讎て我北

9 同 男 卅一才 農 加賀石川郡戸板村

10同 男廿九才 菓子商 同能美郡小松町

(附加、第三號患者は自から實弟一名同病と患ふるを告げたり)

上表は固より統計と云ふべきものにあらず唯第三學期間に於て親しく目撃したる患者に止まるのみ、されは日曜日若しくは休校の日に於て尚二三の患者の來りや否やすと未だ保すべからず若し夫れ各地の醫師をして悉く届出てまひるの制を立てて以て正確に統計を爲したらんは患者の實數の驚くべく多きものならん金澤地方に一治癩院を設くるに必要あるとは確に認むることを得ん

防癩の處置は大凡次の如くすへし

第一、患者の實數を調査すへし奈何とあらは患者のある所を知り其數を詳にするにあらざれば防遏法も施す所あかるへし病勢の益々蔓延し行くや或は漸く盡滅に歸せざるやを知ら能はざ

るへし扱て之れとるには醫師をして癩患者を診する毎に必を届出てしむるの制を立て警察官更は此制の實行を監督し地方檢疫官と檢疫醫とは時々巡廻して檢閲すへし

第二、治癩院を設置すへし其組織は現今學者は認めて是とをせる諸威の式に法り傍ら地方は習慣と人情とによりて斟酌すへし此設置は莫大の費用を要すべきことなきとも地方慈善家の附金と地方慈善事業費(先年皇太后陛下崩御あらせられし時下賜せられし金の如きを云ふ)とを合せて創設の費を得へし維持に要する費額は是非其縣費の補助を受け患者の負擔の食事の費用に止むへし治癩院と設置する地は高燥にして清鮮なる空氣と水とに富み其他凡て衛生上の要求を充たせる所あらざるべからざる市街に接近したるも不可なり熊登の海岸は風光明媚の地多しと聞く、かゝる所お就て適當乃區域を撰ふへ

し或は尙可あるは海岸に接近したる島嶼なり患者収容れ方法は決して強制的あるへららず此の如くすまは唯患者をして治癩院を嫌忌せしむるのみみればなり確に傳染の恐れかしと認めしものは強ち入院せしむるの要あり市醫若しくは町醫等の監督の下に立たしむる迄にて自由なる生活となさしめて可あり収容したる患者に對しても可及的自由を與へ親戚等の訪問を許し輕症のものには適當の職業(耕作、漁魚、手工)を授け患者をして永住の樂土たる念を起さしめ一部は日常の費途に當つへし

第三、豫防的取締あり此事業は稍困難あり奈何とならば杆菌進入の行路の明ならざるを以て今日迄に知られたる傳染病の傳染すへき凡ての行路を遮斷せざるへからざるはかり特に注意すへきまの一、古着あり二、散髪店なり癩桿菌は患者の鼻汁中に多數に存在するものなるを以て同患者の鼻毛を剃除したる剃刀は大に傳染の媒介をみす恐れあり三、錢湯なり四、寄席あり五、飲食物を嚙く肆なり六、娼妓鑛泉宿等の仲居なり前者は黴の爲めに醫の診を受くると屢々あるを以て癩ある時も容易に發見するを得へきなれども后者の如きは法網の下を脱して遊客に姪を賣る黴の媒者たる尙忍ふへしとするも癩の媒者たるに至ては遂に忍ふへからず——ドントル、カントリ——氏の如きは癩病及び黴毒の蔓延方法は殆んど同一徹り出つるものにして其交接によりて病毒と傳播するとは殆んど疑ひなしと云へり——

余か金澤地方に就て特に之れと論ざる所以のもの此地方に於ける癩患者の決して少からざることを全局の美を倣さんとするに之れと一局より始むるの可なるを思へばあり』



漫 録

◎亡友吉村君を憶ふ 松 浪 生

『學友吉村松造君病んで逝く』余輩嚮きお此の報と得て君を知ざるの學友と共お其の夭折を深惜するの情お堪えさりーなり

君は能輿珠洲郡木郎村に生る、地山間の一僻邑たり

聖世の文化未だ普く到らざると雖も君稚くして既に抱負あり、出てゝ飯田町に學ぶ、余の初めて君を識ざる此の時にあり俱に學舎にありて机を並へ相語り相談し、爾來親交水魚も啻からざるものありき、君は小學あるや秀才頓に衆生の上に抜んで常に級の上位を歴して大に異彩を放てり次て余學を本市の尋中校に轉ず、君亦た相踵て笑を負ふて來る、其の四高校お入るや年に

前後ありと雖も亦た志望を同ふせり、蓋し奇縁の淺からざるものゝ存せるあり、君や資性沈毅溫和、徒ら壯言大語をることおらざりしと雖も自ら丈夫冲天の大觀を具へ、自ら池中の蛟龍を以て任し夙に讀書に耽れり、君の病を得たるや本校醫學部に入りて後二年あり其平素強健なからざるの身を以て刻苦勉勵日夜孜々として倦まざりしを蓋し因の大なるものおらん、然れども尙屈することおらず靜かに病を養ふこと一星霜再ひ出てゝ學に就く現は昨歲進んで第三年の級にありき、然るに不幸茲歲早春以來病勢益々加はり終に學を癈めて保養するに如うざるに至り學友の言を納れて陽春四月吾り校を退く、君既に大志あり學亦た明秋を期して成らんとせり當時君か胸中余輩の言いと欲して忍ふへからざるものゝ存せるならん、何を知らん君か前途尙死なる大敵の横はざるを、七月六日遂に病痾に勝

つこど能はず盍然として永眠す、噫々、

君か學を癡するや郷に歸り能の青山白水を友

とし父母の膝下にありて大に保養する所あり、

病即ち漸く怠る君去つて山中温泉に浴せ、歸途

金澤病院お來り診を舊師山碕國手に受く、時に

余君を見る全身削瘦肉脱し骨露はれ余輩を―て

大お危ふましめたるものありき、獨り氣尙豪に

心宇宙と併呑せん底の慨あり、敢て平素の沈黙

を破りて余輩の爲めお語るに、大丈夫漢の將に

偉業を逐けんとするもの先つ百折不撓事に堪ゆ

るの強健なるを要するを以てせり、而して君郷

に歸りて二旬訃音即ち到る、君の病や甚た重く

曠ふして死期の來るを待つより他おさき余既に

聞けり―かも斯の如く速かに悲ひへきの報を得

んどは誰かよく前知したらむ。嗚呼天の妬心多

く屢々神童といへるものと愚に歸らしめまた有

爲の青年を夭折せ―むること多し蓋し天機を啓

くことを恐るゝなるへし君は多望の才と抱き恨

を呑んで又た其の數み入れるものなり、悲哉、

余輩君と郷と同ふし學んては校門を與にし、

遊んてはまた山川を均ふせり然るに今や君既お

無し余輩何を以てか舊交を温むるを得るもれ、

山堂沉座―て往事を進及をきは千思萬感蝟集し

て交々我軟腸を寸斷せしめんとす、おはれ―

余輩歳に於て一日の長あり料らさりき君の亡を

吊ふか如き文を稿せんとは、君う殘せし一言や

耳に重く、君う容顔や視界に逍遙とるか如し、余

輩終生忘るへからざるもの君の爲すあるの春秋

を抱き逐に志望を逐けすして夭折せるおあり享

年漸く十余九、

今や夏季休業終りを告げ學友三々五々相携へ

て各地より來り校門に聚る獨り書齋にありて唧

々たる蟲聲を耳よりて其の欠くる所の亡友を憶

えい滿斛の紅涙濺て盡くる所を知らざるなり、

白玉樓上や途甚た遠し、君の英靈今何れの邊に
かゆのん、噫呼、
懋靨の情殊に深し乃一言と隙へて不敏の罪と謝
とと爾云

松原鉄腸

先師岡部先生と深くかなしみて

明治戊戌歲神無月

番場松浜

月さゝて越路の夕や秋さむし

K、K 生

久保輪濤

亡友富田吉村の二君とれしみて

光りなから入るとはさても秋の月 K、K 生

◎正 誤

未曾藏生

◎ 擲筆の辭

○餘白點[〃]立[〃]須[〃]く熱餘譎語[〃]たるへし。かれ實[〃]ふ
熱餘の譎語なりけとは

生等驚駭の質と以て乏と筆硯の任に承け敏腕達
識の後を繼ぎて叨に重任を負ふもの茲に十數月

○從吾作古 章中大「[〃]」當に小「[〃]」たるへし、
これ Adjective なるの故也

幸ひに會員諸君り提擲に由り僅に其職を完ふと
るを得たり然れども讎て此間の經歷を顧みれり

○同章中 豈然らんや の「[〃]」字は「[〃]」字の誤
植

誌上更に進歩の形迹多く校風の樹立又耳目を聳
動するも足るものなし是れ一に生等か枯腸と菲

○微笑大喝 章中「汝好佛乎曰」の下「否」字を
脱す

才とに由らんとんはあらを生等の推選の意に戻さ
る罪實に大なりと言ふへし今や辭任の期に際し

◎ 漫漫錄 點玄道人

編修嘗て吾に約するに餘白數項の愛と割く
を以てす頃る兩師惠少ふして硯池殆ど涸る
秃筆を洗ふに由るし雜感二三僅に責を塞く
と云爾

○吉野山去年の枝折の道かえて

未だ見ぬ方の花を尋ねむ

こき予か新學年に入る毎に輒ち三唱する所あ
ゝ新學年亦帝遠く去て炎威日よ哀へ白雲飛ひ
來て時漸く搖落に近からむとす而りもこき吾
人學徒の春あらしや來れ吾黨、路と何處よと
らむかを、やよ小子杖な忘ると革鞋いかあ、未
た見ぬ方の花いつれ、然りと雖も吾人豈啻に
其花と眺むるれみを以て足れりとす可けんや
竟によく其果を穫すして息む可さる也

○不可思議 宇宙もと不可思議かし不可思議あ
る容々す若しありとする者へこき畫さるなり
吾與るさす不可思議はそき未可思議なるへき

のみ宇宙終に不可思議あるへかふさる也

○廢物利用 世人輒もすれば得々口を開て曰廢
物利用と予謂らく利用せらるへきものは廢物
ならずと非歟世よく此言を解する者鮮矣否斯
事を行ふ者なし蓋有之矣我未之見也

○追二兔者不獲一兔 然り固に然りと雖もこき
時と同ふしてれみ若夫れ時と異にせんか一兔
と獲て而後また一兔、二兔よりして三兔十百
千兔と雖も亦獲易かふむのみ予は今の世一兔
を追ふの心を以て二兔と追ふの事と勸むるも
のあり否百千兔を獲るを敢てせんと欲する者
也

◎偶 感

有山有水如無意無月無雲却有情秋老空山幽谷裏
陰蟲今夜向誰鳴

◎獨 坐

梵鐘聲遠夕陽微落木風冷行客稀胸裏此時無一物
刹那阿耨入禪機

◎ 自 嘲

烏羽玉の黒白もわらぬ闇の夜と

ねもーろしとや鼻なくあり

◎ 秋夜忍故郷

小立野生

あふかね乃土もさけあん夏の日のあつさも忘れ
さゝかよの糸も短き夏の夜の更くるを惜み樂し
くもまとぬしけるを嬉しくもかたらひけるを秩
の實の父にも別れ柞葉の母にもわかれみすゝか
る科野の國や越の海乃浦々渡りくりからの山坂
こゑて芽はしき金の澤に名も高き物學ひ舎に遙
々ど來入りそめたる去歳はしも夢とくれゆき新
玉の今年も早くみつくりの半すきけり軒もる風
身にしみてうき秋の立ちてゝわれは日ねもすお
故郷しのふ夜もすうら家とそ思ふちゝのみの父

を戀しきいゝそはの母そゆうしき忍ふれと海路
い遠し戀れども山路は深し月影乃出るあたりや
故郷と思ひ忍へとしのひつるかひはなくして秋
の夜のふけゆくまゝに衣手の濡れこそまされ露
しけくして

故郷をこひまさるかな秋さゆる

越路の方お照る月と見て

◎ 觸 感 錄

濱口竹軒

竹軒嘗養牛於禪房僧來訝曰濱氏止之牛臭滿堂我
心恐々焉不忍也予曰大人嘗口牛乎曰未之有然何
知之乎僧撫青顱曰本月本日此時何人養焉其臭類
牛店臭故問而已非牛則善動鼻翼去予食牛如元
評曰世事往々有之裝外美表内醜
他日過僧房酒肴滿座予入曰無負貴教乎爲大人懼
懼然畏之也忽然電靈至須臾裝舊曰拙寺嘗有酒門
山門未入葷酒乞勿怪予噉然退焉

評曰幽鼠以木筐欲破則嚙已哉一面爲遁辭一

面破法

○

雜 報

◎竹軒雜詩

詠松

千年無改歲寒松竹與梅花能做冬一片精神長不變
風雲何日起蟠龍

經古戰場

一朝電響轉頭空吊古孤吟泣草蟲枯木悲烏邊月慘
陰雲圍樹怒秋風

江村夕照

碧波萬頃望悠悠啞軋孤舟驚白鷗遠寺鐘聲楓葉亂
淡烟一抹夕陽收

晚秋感

四山無葉野無烟吟杖數回思浩然昨日丹楓今日落
暮鐘寄恨故鄉天



○第九回通常會 五月二十九日午後壹時半大學豫科扣所に於て開會と北條會長未だ臨席せられざるにより高安副會長先つ開會を宣告せられ會則修正委員會の結議案を議せられむとす茲に於て松原三郎氏其の結議案を報告し直ちに議事に入り雜誌發刊の數を増すへしと論し更に委員會の結議案と修正せんと熱心なる數氏の議論ありしも遂に委員會の結議案は全然成立と見るに至り次て講談に移る即ち岡田剛吉君演壇よ表はき「婦人の腹水に就て」てふ演題にて殊に婦人科學上注意すへき諸點と論述し腹水の婦人に於ける惡性腫腸の緊要なる合併症なる事を警ましめ數多の經見せられたる事實を紹介し喝采の内に撞を下らる、時に三時茲に於て一同大學豫科

物理學教室に入りて「レンツェン」氏X線の試験を見る、理學士野田眞氏は宏大にして緻密なる装置により種々の電氣作用と試験し遂に會員に供覽せしむるに「レンツェン」氏X線を以てす、且つ一々懇到に説明せられて餘蘊なく理學の素養なき者も尙之れを得知し珍奇乃新知識と納め有益愉快筆紙に盡し難かりき最後に該X線を以て撮影せる物を幻燈を以て紹介せられ一般の利益を添へたり、X線實驗終り引き續き「マッサーグ」に就て「下平用彩先生」『如是我觀』小川勝陳先生)の二講談あるへき善なりしも時已に五時半は垂んたりしを以て高安副會長は閉會を告げられたり實に今回の久しく待ち又待ちにしX線の實驗ありし事とて會員の集まるもの殊に多く殆んど二百を超へなんとせり、

○始業式と入學式 九月十二日本校講堂に擧げらる式場掛先つ新入生を職員に次て在來學生

に紹介し後校長嚴かなる音調を以て我來學生心得を朗讀し且つ新入生ふ特に注意と與へられ次に大學豫科教務課主幹中野教授大學豫科教務上の改正と特待生の姓名を報告し以て式を終る

○新入會員を迎ふ 吾輩^ハ入學式と共に百名に垂んたる新入會員を迎ふ諸君^ハ天下生殺の大權を主宰し普ねく濟世れ仁を施すの學は抑も何なるか法學も非と文學も非と工學に非と理學に非と亦農學にもわらず我醫學を措て將た何くにありある我か醫學や至高至重の域を占むる丈け夫れたけ深遠且つ廣漠、從つて其の研究亦決して易らざる處苟も熱心なる精神と敏捷なる能力とと有する士お非すんは此の局に當るを得ざるあり吾輩は茲に多望なる才能と活潑なる全能とと完備する多數の會員を得たるに實に欣悅に堪へざるかりいてや諸君と共に日進月歩の學界に棹さん諸君よ勉め勵む以て新奇なる學理と實驗

とを得て學問の爲めお腦力を吝じ勿れ本會の爲めに夫を盡せよ、

編輯委員 贊成會員 加藤 慶三
編輯委員 通常會員 醫四年 深美貞之助

○役員の改選 本會規則第五條により役員の

全 醫四年 望月 慶作

改選を行ふ其の結果左の如し

全 醫四年 大西 瀨治

會長 北條 時敬 副會長 高安右人

全 醫三年 河野 勇

評議委員 櫻井小平太 評議委員 山崎 幹

全 醫三年 兒島 亮吉

全 小川勝陳 全 下平用彩

全 濱口 海廣

全 高山正雄 全 金子治郎

全 藥學科三年 内山忠次郎

主 計 山瀬時吉

○級長幹生の任命 本校規則より左の如く

贊成會員幹事

未 定

任せらるたり

通常會員幹事 醫科四年

河内監次郎

醫學科四年級々長 教授 山 崎 幹

全 醫科三年

中嶋 擴三

全 第三年級々長 全 小川 勝陳

全 醫科二年

牧 良 一

全 第二年級々長 全 高山 正雄

全 醫科一年

松 村 魁

全 第一年級々長 全 金子 治郎

全 藥學科三年

龜田 伊門

全 藥學科第三年級々長 全 櫻井小平太

全 藥學科二年

山崎彦太郎

全 第二年級々長 全 高山 基重

編輯委員 特別會員

松本善次郎

全 第一年級々長 助教 教授 堤 從 清

醫學科第四年級幹生

河内監次郎、大塚正一

全 第三年級全

中西政太郎、中嶋擴三

河野勇

全 第二年級全

全 第一年級全

藥學科第三年級全

全 第二年級全

全 第一年級全

○慶賀 高安教授の正六位お叙せよと、櫻井

教授は勳六等に叙し瑞寶章を授けられ、佐々木

教授の正七位に叙せられ、小川、山崎兩教授は高

等官五等に叙せらる、又賛成會員鈴木寛之助君

の海軍少軍醫に任せられ、又海軍病院付を命せら

るし、か次て比叡艦乗組仰付けらる本校出身者お

して海軍に入らるしもの君を以て實に嚆矢とせ

○賛成會員 安村順吉、國付金城の兩氏は陸

軍見習醫官に任せられ安村氏は大坂第四師團、

國付氏は仙臺第二師團某聯隊付を命せらる、全

高岡榮、松浦啓三、岩倉兵次郎、河村多郎の四氏

は一年志願兵として金澤第七聯隊に勤務中なり

しの先般現役醫官採用試験に合格し陸軍見習醫

官として名古屋第三師團某聯隊付に任せらる、

其他金澤病院内科部醫員末岡外次郎氏は昇給せ

らる

○金澤病院調劑所長の變勤 櫻井小平太氏は

願に依り金澤病院調劑所長を免せられ高山基重

氏更ふ同所長に任せられたり

○草鹿講師 「ドクトル」草鹿丁卯次郎氏の去

る六月卅日醫學部兼勤を免せらる

○末廣助教 末廣義介氏助教授に任し醫學

部勤務を命せらる氏は草鹿講師に代りて獨乙語

を擔任せらるゝ外尙物理學をも受け持たる勿論

本會に加入せられたり

○山崎教授 官命により學術取調への爲め入

月中旬上京九月初旬歸校せられたり

○小川教授 上京中なりし同教授は八月中旬

歸校せらる

○下平教授 關西地方漫遊中なりし同教授は

八月中旬歸校せらる

○高山教授 學術研究の爲め上京中かりしか

九月初旬歸校せられたり

○上田新任教授 嘗て金澤傳染病院長として

名聲喧々たりし同氏は講師を囑托せよき細菌學、

衛生學を擔任せられたる九月下旬教授に任せら

れ高等官七等に叙せられたり吾輩歡喜迎へさら

むや勿論新任后直ちに本會へ加入せられたり

○醫員の變勤 金澤病院醫員藤井亥之吉、岡

本京太郎、金子太須計、千田榮三男、本多三次郎、

佐野里吉、長谷川清松の七氏は去る七月願ふよ

り職務を免せられ、村田良仲(外科)津川亘(婦人

科)沖野彌一郎(外科)太田多計作(眼科)金森璋

次(眼科)の六氏更ふ醫員を拜命せり吾輩の去ら

れたる諸氏か特に本會の爲めに盡粹せられたる

勞を謝すると共に新たに迎ひたる諸氏も對し本

會の爲め一臂の力を致されむ事を希望して止ま

ざるなり

○金城診療院の設立 藤井亥之吉、岡本京太郎

、金子太須計、千田榮三男の四氏の八月中旬本市

彦三八番丁に於て金城診療院を開かれ各獨特の

技を振ひれつゝあり聞くなほ藤井氏は外科岡

本氏は産科婦人科金子氏の眼科千田氏の内科擔

當の由氏等は金澤病院ありし頃名聲赫々學理

實地共に吾輩乃欽望して止まざる所なりき宜な

る哉診療を乞ふもの頗る夥多敷日々數百お達す

と云ふ諸氏は愈々精勵以て天下有數の大病院た

らしむると期せよ

○本多三次郎氏 は先般大坂痘苗製造所技手

を拜命し八月初旬赴任せられたり

○長谷川松清氏　は去る八月初旬郷里富山に開業せらる

○佐野里吉氏　は金澤病院を辭せらるゝや江沼病院醫員に任せられたり

○藤井温良氏　金澤病院醫員藤井氏は東京痘苗製造所技手に轉任せられたり

○水野富次郎氏　今般金澤病院醫員に任せらるゝ内科第二部勤務と命せらる

○太田多計作氏　眼科勤務を止め外科勤務を命せらる

○鈴木學士の尺牘　獨國留學中の鈴木學士は「マルブルグ」より「キール」に轉學せられし由去る六月中消息に接せり次に擧ぐるもの即ち之れなり

各位益々御勇健御勤學奉賀候降て小生義無異消光罷在候最早渡歐以來一年半と過ぎたきとも今日迄何に一つとして成効したる事も無く「ぐず

く」と送光深く慚愧の至りに不堪候日本に居れば西洋を思ひ西洋へ来て見れば日本の方か善く結局小生の如き庸才にては學文れ奥堂に達する事能はずと覺悟罷在候』

小生從來「マルブルグ」に遊學致し居り候も今回都合により當地へ相轉し候實は「マルブルグ」には一ヶ年程も滞在罷在り最早飽き果て申候當地は御承知の如く獨乙第一の軍港にて人口大凡九万余港内水深く最も大艦を舶するに適し離宮、東海鎮守府海軍兵學校大學獨乙帝國其他二三の私有の造船所あり且つ其の一部商港たるを以て船舶の出入頗る頻繁にして殊に近時東海及び北海を連絡する「ウヰルヘルム」帝運河の開通せるを以て一層要港とありたりと云ふ當地も之れより好時期となり灣内の眺望も絶佳あり』大學は左程廣大からざるも十七世紀の建設にして學生數は六七百より千以内とす今の大學本部は凡そ

二十五年前の改築に於て離宮と對峙し東側は並木を隔て灣に面し最も好地を占め是れに接續して圖書館、解剖、動物、生理等の諸教室羅列し之に次ぎ病室は別て一區域を構ふ之れ等は皆か近來の建築よりて外觀最も美なり病室の如きは今日尙増築せるを見受け候小生も未だ轉居して二週間余りなきは充分の觀察の出來不申候何れ委細は追々と申上くべく候教授連は是迄は名を聞きたる人は少なく候も軍陣外科と以て有名なる「エスマルヒ」氏(當時は講議せずと云ふ)生體に「ヘンゼン」氏あり解剖は彼の細胞組織を以て有名なる「フレンミング」氏あり常解剖教室の構造は左程大ならず百人の學生は余程無理なく目下「フレンミング」氏の顯微鏡實習始まり出席者は五十名位實習室極めて狹隘あるを以て恰かも鮮ても潰けた如く窮窟至極なり實習の模様は吾々か金澤てやつたと左程大差なし獨乙語て

やる丈け違ふ位なり解剖教室所屬の標本陳列室にのみ余り澤山よいなし併し手入れの行き届き居る丈は感服の外なし又解剖の「フレンミング」氏の外に權教授おは伯爵「スベ」氏助手には「ノウエス」氏あり」元來小生の當地を目差し參り候次第は申も迄も無く「フレンミング」氏の技術を習ふ爲めなり土地は北方へ片寄り居候を以て夏期は善さも冬はどうも吾々に少しく閉口故長くは居らぬ積りセメて五六ヶ月も居れば澤山かりと考へ候何とかれは今日の學問程度にては兎に角細胞を以て有形體の原基成分となすを以て何れの仕事をあすにも之れか智識は必要にて先づ先の本場て仕入るゝの自分も多少安心せる處あるべくと存候昨今は未だ來たばかり諸事不慣にて全速力にて仕事をすると云ふ譯にも參らず毎日「ザラマンデル」の子かどをひねくり居り候「フレンミング」氏は實に質撲懇切の人にして彼

の剃刀にて切る様を世辭を云ふ人種とは全く反對にて眞に世話を焼き呉るゝ様子故小生も大ひに好師を得たと懐ひ居候又同氏の許にて仕事する者の目下小生一人従つて万事好都合なり同氏は最早や五十以上に見受けらるゝもまた配偶なき由西洋には随分此の種の人多き様なり』例年の解剖會の本年は當「キール」まで開會せられ小生も同會に臨席の序少々諸大學を巡歴し度き積りにて出願せるも許否れ返事も無く解剖會の期日は迫る金はなまど云ふ始末大ひに困却急に荷物を取纏め解剖會出席兼轉學と云ふ一舉兩得の名策を案出し辛くも解剖會の後半丈けあ出席するを得たり併し大切れ巡歴は全く晝餅と相成候今回の解剖會の四月十八、十九、二十の三日にて小生は全体を見されは一般に涉りたる概況を申上兼候へとも概して左程之れと申す程の事も無之哉に覺へ候小生の聞きたる演舌中「モリ

ニール」氏の肩胛關節の器械的作用及び「フルトクランツ」氏の關節軟骨割裂方位など大ひに喝采を博したる様ありし又日本人にては小生の外か大澤大學助教も出席の上氏か多年精勵研究さきたる珍貴の動物「バッテリヤ」に付き一場の演舌を試みられたり之れ解剖會にて日本人演舌の嚆矢あり眞に同學士の爲め日本學者の爲め大名譽と云ふへし小生の残念から夫れ迄にまた到着せず聞き落したり

先は轉居御知らせ旁御無沙汰の申譯迄何れ委細の後便に譲り候不具

四月廿九日夜

鈴木文太郎拜

十全會各位

因みに記す同學士宿所は次の如し

Schwannweg 27, Kiel, Deutchland.

又金子教授の許へ鈴木學士より彼の解剖會列席者の寫眞を寄贈せられし由

○高岡得業士會　去る六月より舊第四高等中學校醫學部卒業生の本會に入る者頗る多し皆な十全會なるものゝ成立して智識交換と會員の親睦とを主旨となし學術講談會と開設し雜誌を發刊するを聞き會員を介して入會を求めしものあり中越高岡得業士會の如きも亦然り嗚呼本會は益々日と追而改良せられ發達し駉々乎として完備の域に進み規則改正せられて正に實行の緒に就き有力なる賛成會員益々増加して本會の爲め一臂の力を添へられむとす實に本會は發達と隆盛とは期して待つべきなり

今高得岡業士會よりの來簡を左に掲ぐ
前略本年二月小川先生よりの書信中より十全會云々となり次て六月頃十全會雜誌第五號の寄贈に預り一讀致候處中々の好雜誌にして然も生等に於て大關係ある四高の事あれり小川先生等の申込みあり關係諸氏に談し候處何れも

大賛成ひて入會致度き様申され小生に手續きを頼むとの事にて速かに小川先生にまで報せむと存候(中略)熱性病等流行の爲め失禮なる多忙に取紛れ今月迄入會の手續遲滯致候譯かれは今回御申越を機とし入會致候間宜敷御取計らひ被下度候入會者は小生の外三名にて即ち河村宗作、吉崎郡太郎、飛見丈俊、上野貞吉の四名に候(中略)因に申上候當市内には得業士四名有之候へども何となく疎遠に失する風ありしにより本年三月以來茶話會あるものを毎月一回舉行する事とし實行致候折柄礪波郡の得業士會より聯合の申込あり依て毎年四月二十日高岡市あ十月二十日礪波郡出町に聯合會を開く事に定め候茶話會創立以來大ひに親睦を得て實地的診斷、手術、治療には相互談話或は補助をなし大ひに便利を得て喜悅致居候特に其の當時よりは共同にて中外醫事新報

日本眼科學會雜誌、醫海事報、私立衛生會雜誌
細菌學雜誌、東京醫學雜誌等と交讀致候又七
月よりは有益なる諸成書を講讀する事に定め
又八月よりは毎月擔當を定めて一名宛一疾病
に付て出來得る限り學說實驗と蒐集して談論
する事に決定致候云々

六月十三日

上野貞吉

十全會幹事御中

吾輩はかゝる有益なる會合の益々世に行われむ
事を望むと共に先輩同窓の諸君か愈々本會に加
入せられむ事を希望して止せざる處なり

○池田和太郎君 君は明治二十四年我校を卒
業せられ一人なるか爾後北海道に於て開業せら
れ盛んに濟生の仁と施す、氣焔万丈乃由先達
而本會へ入會せられ本會の爲め一臂の力を添
ふへしとれ通信に接せり

○富永君と山路君 生理衛生細菌學副手富永

浩氏の先般辭職せられ山路政一氏其の後ちを襲

かる勿論山路氏の本會へ加入せられたり

○長谷川清一君 賛成會員同氏は金澤病院辭

職后郷里富山に開業せらる

○澤賢吉君 賛成會員同氏は能洲私立第一七

尾病院に奉職の處先般辭任郷里能與浦上村に開

業せらる

○橘薫君 賛成會員同氏は澤君の後任として

私立第一七尾病院に聘し先般赴任せらる

○田上涉君 賛成會員陸軍三等軍醫同君は今

般軍醫學校學生として上京せらる

○富澤外次郎君 賛成會員同君は今般東京永樂

病院醫員を拜命せり、同院に於て我の賛成會員嶋

田吉三郎、中川幸庵、白井精一の三君已に前より

あり今又富澤氏か赴任せらるるによりて見るに

永樂病院と本會賛成會員由來宿縁ありと云ふへし

四君共み内科に奉職し山根學士の懇篤深遠なる

「クリニック」に親侍せらるゝと云ふ

○藤井温良君 東京痘苗製造所技手奉職中な

る賛成會員同君は脚氣及び助膜炎に襲はれ東洋

内科病院へ入院せられしと云ふ君よ爲國家自愛

せよ。

○松本善次郎君の入院 特別會員同君よ兼て

肺患を得攝養怠りありしか故に殆んど全治の

眞果を收め大ひに金澤病院外科にありて名聲赫

々たりしか先月上旬突然咯血せられ直ちに入院

山崎佐々木兩教授の懇篤周到なる治療と受けつ

ゝあり恰も當時院務頗る多忙君特意乃敏腕と揮

ひ出精黽勉實に吾輩をして感服せしめたりさ或

は爲めに攝養の度と害ひ給ひしならひか君願く

は自重速に良効ある治療と得む事を期せよ

○森嶋彦夫君の負傷 金澤病院内科在勤の賛

成會員同氏は先月上旬往診の爲め奔走中腕車轉

覆し左足關節捻挫と來し即時入院治療せらるる

下快方院務に従事せらるゝと雖も未だ全癒と得

られざる由公務精勤の余事の茲に至りしもの吾

輩は速に全癒得られむ事を希望して止まざるな

り

○竹中繁太郎君 曾て檢疫官として山梨縣に

奉職せられし賛成會員同君の去る七月臺灣へ渡

航せらるし由

○紺谷良作君 東京痘苗製造所技手賛成會員

同君の目下郷里に歸り開業せらるゝの備華れさ

く整ひし由なるも後任者と得ざる爲め許可を

得ざる由なり

○野田捨疫事務官の來澤 前本校教授同君は

此程北陸出張を命せらるる八月中旬來澤の上金谷

館に於て衛生に關する件と談せられたり

○敷波重次郎君の歸省 醫科大學解剖學助手

同君の七月當地に歸省せらるる八月上旬還京せら

る

○白井精一君の歸省 東京永樂病院醫員同君 只師か葦陶に基きて大に國家の爲めに竭さんと
は七月下旬歸省八月初旬更に上京せらる聞く所 慾す願はくは瞑せよ

○東、富田、吉村の三君逝く 賛成會員金澤病
院内科勤務東龜太郎君、通常會員醫科四年富田

○前教授岡部忠君の訃言 万籟音と歛めて蟀
信一君及び醫科三年吉村松造君は何をも兼て肺

蟬椽下に悲み滲雲君の訃言と齎す君や在任の
患に罹らる治療中の處吾輩専ら其快復を祈りし
頃肺患に罹り山碯教授の懇篤なる注意により轉
お豈計らんや東君は先月中旬富田君へ上旬吉村
地療養を兼ねて任を南地姫路病院に轉し攝養余
君は又相次て有爲の才を齎らして空しく黃泉の
念なかりし吾輩常に好真ある轉歸を得られむ事
客とならる噫天何を我か會員に崇ることの甚し
と祈りしに報あり病症怠らす去て郷里に歸り專
きや君等郷里の父母同胞を辭し有爲の才な抱て
ら加療せらるゝと更に悲報あり藥石其効と奏せ
圖す旅途に上られ今や温容、矯語に接するの
す盍焉逝去せられしと嗟何ぞ慘なるや君か曩時
時なし噫悼ま一哉

○赤十字石川支部看護婦淺野貞子 嬢は傳染

我校にありし頃吾輩親しく「レクチャニア」お列
病室看護は從事中不幸腸質扶斯にかゝり直ちよ
す其の音調や明瞭よして其説や快なり君う勇ま
金澤病院へ入院治術盡さるるなりしも藥術効
しき眼光と漆然たる美髯は朧として眼底に残り
と奏せず遂に去る九月卅日黃泉の客となる世界
浩々たる音吐侃々たる聲咳髣として耳底と去ら
往々たる例ありと雖とも然も職務の爲めお斃
す然るに今や先生なし嗟天何を無情なるや予輩

れしの例未た吾輩の多く耳にせざる處嬢將又冥
 せんとして云ひけらく妾若し死するとも秋毫れ
 怨みあし只た身赤十字社看護婦の末列を汚し未
 た國家お致す能はざるハ千歳の恨事なりと其情
 や憐むへく其の心や雄々吾輩は國家の爲め此
 の女丈夫を失ひしを深く惜まざるをさ得るあり

中外醫事新報 每號 全 社
 公衆醫事 全 全 社
 順天事堂事研究會雜誌 全 全 會
 日本眼科學會雜誌 全 全 會
 國家醫學會雜誌 全 全 會
 濟生學會醫事新報 全 濟生學會
 校友會雜誌 全 京都醫學學校全會
 中央醫學會雜誌 全 愛知醫學學校全會
 獨乙語學雜誌 第一號 全 社
 一高志林 第九號 第一高等學校校友會
 萬國診療年報 第二卷 吉松文治君
 東北醫學會雜誌 每號 第三高等學校全會

◎ 寄贈書籍

日本醫事週報 每號 全 社
 醫海事報 全 全 社
 岡山醫學會雜誌 全 全 會
 北越醫學會雜誌 全 全 會
 京都醫事衛生誌 全 全 社
 京都醫學會雜誌 全 全 會
 緒方病院醫事會報 全 全 院
 助産乃榮 全 日本助産婦學會
 研瑤會會誌 全 第五高等學校同會

